

# 源氏物語の古筆切を読む

針本正行

## はじめに

本稿では、実践女子大学百二十周年記念事業「宮廷の華 源氏物語」におけるシンポジウム「源氏物語と古筆切」で紹介した架蔵の古筆切をもとに、『源氏物語』の断簡がどのように物語の読みに繋がるのかについて述べてみたい。

### 一、伝藤原為家筆源氏物語切「薄雲卷」一葉

ここに紹介する断簡は、為家を伝承筆者とする『源氏物語』「薄雲卷」切で、大四半切の一葉である。(注)今般、「実践女子大学百二十周年記念事業」として展示されている「第一部『源氏物語』と古筆切」の中扉及び番号2に掲載され



ているもののツレであり、<sup>(注2)</sup>いわゆる河内本の一本として位置づけられているものである。『源氏物語大成』六〇七頁に相当する。本断簡の場面は、明石の姫君が二条院に引き取られることになり、入京を拒む母明石の君と別れる条である。

それでは、本断簡を翻刻し、その中の1〜5の本文と、名古屋市蓬左文庫所蔵尾州家本（河内本<sup>(注3)</sup>）、いわゆる別本<sup>(注4)</sup>に分類されている陽明文庫所蔵本（陽明本<sup>(注5)</sup>）、さらに、青表紙本と比較し、表現の相違を確認してみたい。

伝称筆者 藤原為家（一一九八〜一二七五）

書 誌 縦凡三二纏、横凡二六纏

書写年代 鎌倉時代中期頃。「・」は朱点。

- 1 とめてたくつらつきまみうちかほれるほとなど・いへは
- 2 さらなりよそにおもひやらんほと心のやみ・おしはかり
- 3 おほすに・いと心くるしければ・よろつうち返しのた
- 4 まふ・あかす・なにかた、かうくちをしき身のほとならず
- 5 たに・もてなさせ給は、ときこゆるものから・ねんしあ
- 6 へすうちなくけはひあはれなり・ひめ君はなに心も
- 7 なくて・御くるまにのらん事をいそぎ給ふ・よせた
- 8 るところには、きみみつからいたきていてたまへり・かた
- 9 ことこのゑはいとうつくしうて・そてをとらへての
- 10 りたまへとひくもいみしうおほえて

11 すゑとをきふた葉のまつにひきわかれいつか

●河内本「薄雲卷」(三卷 二四六～八頁・五ウ～六ウ)

- 1 とめてたく・つらつきまみうちかほれるほとなど・いへは
- 2 さらなり・よそにおもひやらむほとこの、ろのやみ・をしはかり
- 3 おほすに・いとこ、ろくるしければ・よろつうちかへしのた
- 4 まふ・あかす・なにか・た、かうくちをしき身のほとならず
- 5 たに・もてなさせ給は、ときこゆるものから・ねむしあ

●陽明本「薄雲卷」(六ウ～七オ)

- 1 とめてたく×つらつきまみのかほれるほとなど×いえは
- 2 さらなり×よそに思×ひやらむ×ほとこの心のやみ×をしはかり
- 3 給××××いと心××くるしければ××××うちかえしの給
- 4 ××××××××××××かく、ちをしきみのほとならず
- 5 たに・もてなさせ給は、ときこゆるものから・ねむしあ

●青表紙本「薄雲卷」(『源氏物語大成』六〇七頁)

- 1 とめてたく×つらつきまみのかほれるほとなど×いへは

2 さらなり×よそのものに思やらむほと心のやみ×をしはかり

3 給に×××いと心××くるしければ×××うち返し×の給

4 ×××あかす×なにか××かくくちおしき身のほとならず

5 たに×もてなし×給は、ときこゆるものから×ねんしあ

右に示したように、本文の相違が四箇所ある。一つは、本断簡・河内本「おしはかりおほす」とあるところ、陽明本・青表紙本が「おしはかり給ふ」とある。二つは、本断簡・河内本「よろつ」とあるところ、陽明本・青表紙本の本文は無い。三つは、本断簡・河内本「のたまふ」・「朱点」・「あかす」・「朱点」・「なにかた、」とあるところ、陽明本の本文は無く、青表紙本は「の給あかすなにかかく」とある。四つは、本断簡・河内本・陽明本「もてなさせ給は、」とあるところ、青表紙本「もてなし給は、」とある。

本断簡及び尾州家本をもとに、物語内容が分かるように本文を作ると次のようになる。なお、本断簡の本文は、「\*」から「\*」に該当する。

いとうつくしげにて前に据ゑたてまつりたるを見給ふに疎かには思ひがたかりける人の宿世かなと思ほす。この春より生ほす御髪、尼削ぎのほどにて、ゆらゆら\*とめでたく、頬つき、まみ、うち香れるほどなど、言へばさらなり。よそに思ひやらむほどの心の闇推し量りおぼすに、いと心苦しければ、よろづうち返しのため。「飽かず何か、ただかうくちをしき身のほどならずだに、もてなさせ給はば」と聞こゆるものから、念じあへずうち泣くけはひあはれなり。姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎ給ふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出で給へり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて、「乗り給へ」と引くも、いみじうおぼえて、

末遠き二葉の松に引き別れいつか\*木高きかげを見るべき

えも言ひやらすいみじく泣けば、さりや、あな苦しと思して、

生ひそめしねも深ければ武隈たけくまの松に小松の千代を並べん

つるにはのどけく」など慰め給ふ。

ここで、注目したいのが、明石の君の発言である。現在、青表紙本を底本とする、新編日本古典文学全集本(注6)は、

うち返しなのたまひ明かす。「何か、かく口惜しき身のほどならずだにもてなしたまはば」と聞こゆるものから、

念じあへずうち泣くけはひあはれなり。(四三三頁)

であり、新日本古典文学大系本(注7)は、

うちかへしの給明かす。「何か、かくくちおしき身のほどならずだにもてなし給はば」と聞こゆるものから、念

じあへずうち泣くけはひあはれなり。(二二二頁)

である。本断簡にもとづく、明石の君が母として、光源氏にすべてを託さざるを得ない心情が「飽かず」、「ただ」、「させ給はば」などという表現に凝縮されているのではないだろうか。光源氏は、「よそに思ひやらむほどの心の闇推し量り」と、母としての明石の君の心を思いやり、「いと心苦しければ、よろづうち返し」と言葉を尽くす。しかし、いったい、光源氏はどういう言葉で明石の君に語りかけたのであろうか。光源氏の発言が具体的に明らかにされないうちで、明石の君は、「飽かず」と、光源氏の対応を疑い、否定していくのである。しかも、姫君が、「何心もなく、御車に乗らむことを急」ぎ、明石の君の袖をとらえて「乗り給へ」と引くので、「末遠き二葉の松に引き別れいつか\*木高きかげを見るべき」と、成長した明石の姫君を見ることができないのではないかと、泣きながら光源氏へ

訴えるのである。しかし、その後、明石の君と姫君との親子の往還は、一切語られることはなく、四年後の「初音巻」でようやく語られることとなるのである。

姫君の御方に渡り給へれば、童、下仕へなど、御前の山の小松引き遊ぶ。若き人々の心地ども、置き所なく見ゆ。北の御殿おとどより、わざとがましくし集めたる鬚籠ひげこども、破子わりこなど奉れ給へり。えならぬ五葉ごえふの枝に移る鶯も思ふ心あらむかし。

「年月をまつに引かれてふる人に今日鶯の初ね聞かせよ

音せぬ里の」と聞こえ給へるを、げにあはれと思し知る。事忌みもえしあへ給はぬ気色なり。「この御返りは、みづから聞こえ給へ。初音惜しみ給ふべき方にもあらずかし」とて、御硯取り賄ひ、書かせ奉り給ふ。いとうつくしげにて、明け暮れ見奉る人だに、飽かず思ひ聞こゆる御ありさまを、今までおぼつかなき年月の隔たりにけるも、罪得がましよう心苦しと思す。

引き別れ年は経れども鶯の巢立ちし松の根を忘れめや

幼き御心にまかせて、くだくだしくぞあめる。

姫君は、二条院から六条院に移り紫の上のもとで養育されていた。薄雲巻から四年後の春、光源氏が姫君の部屋に正月の挨拶に訪れていたところに、母明石の君から、「年月をまつに引かれてふる人に今日鶯の初ね聞かせよ」という新春の便りが届けられた。光源氏から返事を書くように勧められた姫君は、「引き別れ年は経れども鶯の巢立ちし松の根を忘れめや」と返した。姫君の「引き別れ」・「松の根を忘れめや」の歌言葉は、新春の母明石の君の「年月を松に引かれて…」をうけると同時に、四年前の母の歌「末遠き二葉の松に引き別れいつか\*木高たけきかげを見るべき」の「引き別れ」及び光源氏の歌「生ひそめしねも深ければ武隈たけまの松に小松の千代を並べん」の「ねも深ければ」をも

受けているのではないだろうか。明石の姫君は、生まれてはじめて、「引き別れ……」という和歌を詠んだので、物語が、「幼き御心にまかせて、くたくだしくぞあめる」と評するのも仕方がない。母として、明石の君は、この姫君の返歌をどのように受けとめたのだろうか。六条院完成後の最初の元旦に、光源氏は、四年前に、「飽かず」と言葉をついだ明石の君の疑念を、姫君との贈答歌を整えることにより晴らすこととなるのである。

本断簡「よろつうち返しのためふ・あかす・なにかた、かうくちをしき身のほとならずたに・もてなさせ給は、」を、「よろつうち返しのためふ。『飽かず、何か、ただかう口惜しき身のほどならず、もてなさせ給はば』」とするこ  
とにより、明石の君の母としての内奥が明らかにされる。

現在、伝藤原為家筆源氏物語切「薄雲卷」は、十数葉が確認されているが、今後、あらたな断簡の出現を期待したい。

## 二、後京極良経筆源氏物語切「須磨卷」一葉

ここに紹介する断簡は、後京極良経を伝承筆者とする『源氏物語』「須磨卷」切で、もとは、四半切の一葉(注8)か。『源氏物語大成』四三二頁に相当する。本断簡の場面は、須磨に退去して二年目の二月、頭中将が光源氏を見舞う条である。

それでは、当該断簡を翻刻し、陽明文庫所蔵本（陽明本）、青表紙本と比較し、表現の相違を確認してみたい。なお、名古屋市蓬左文庫所蔵尾州家本（河内本）には当該本文が落丁している。

後京相良経公いふハ



いふれまはかりなるは、  
うりささやうらわつねく  
舞、井中れよくあしは  
し、

伝称筆者 後京極良経（一二六九～一二〇六）

書 誌 縦二十四・一糎、横七・五糎（もとは、横十五糎、一面八行書か）

書写年代 鎌倉時代末期頃。「・」は朱点。

- 1 いろのきはやかなるにあをにひの
- 2 うちきさぬき<sup>し</sup>うちやつれて・ことさ
- 3 らにゐ中ひもてなし給へるし
- 4 も・いみしうみるに・ゑまれきよら

●陽明本（五二オ・ウ）<sup>(注)</sup>

- 1 いろのきかちなる×あをにひの
- 2 かりきぬさしぬき<sup>し</sup>うちやられてことさ
- 3 らにゐ中×ひもてなし給へる×
- 4 ×××××みるにゑまれてきよら

●青表紙本「須磨卷」（『源氏物語大成』四三三頁）

- 1 いろのきかちなるにあをにひの
- 2 かりきぬさしぬき<sup>し</sup>うちやつれてことさ
- 3 らにゐなかひもてなし給へるし

4 もいみしうみるにゑまれてきよら

右に示したように、本文の相違が三箇所ある。一つは、本断簡「きはやかなるに」とあるところ、陽明本「きかちなる」、青表紙本「きかちなるに」であり、二つは、本断簡「うちき」とあるところ、<sup>(注10)</sup>陽明本・青表紙本「かりきぬ」であり、三つは、本断簡「しもいみしうみるにゑまれきよら」とあるところ、陽明本「みるにゑまれてきよら」である。本断簡及び青表紙本をもとに、物語内容が分かるように本文を作ると次のようになる。なお、本断簡の本文は、「\*」から「\*」に該当する。

所のさま、絵に描きたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、疎かなるものから、めぐらかにをかし。山賤めきて、許し\*色のきはやかなるに、青鈍も桂、指貫、うちやつれて、ことさらに田舎びもてなし給へるしも、いみじう見るに笑まれ清ら\*なり。取り使ひ給へる調度もかりそめにしなして、御座所もあらはに見入れらる。

本断簡と他本と異なる最大のところは、「許し\*色のきはやかなるに、青鈍も桂、指貫、うちやつれて」の箇所である。「きはやかなる」「うちき」の二語に注目して、本場面における光源氏像について述べてみたい。

「きはやかなる」の語例は、次に掲げる二語である。

一例目は、鈴虫巻冒頭近く、『源氏物語大成』一二九一頁に相当する、に語られている。光源氏五十歳の夏、蓮の花の盛んな頃、女三の宮の持仏開眼供養が営まれる。

阿弥陀仏、脇士の菩薩、おのおの白檀して造りたてまつりたる、こまかにうつくしげなり。閑伽の具は、例のきはやかに小さくて、青き、白き、紫の蓮をととのへて、荷葉の方を合はせたる、名香、密をかくしほほろげて焚きき句はしたる、

本尊の阿弥陀仏、脇士の菩薩も、「こまかにうつくしげ」であり、閑伽の道具も、「例のきはやかに小さ」いものであった。青色、白色の蓮華が造花で整えられ、荷葉の法に調合した名香が蜜を少なめにほぐしたものを焚きしめていた。女の三の宮の年齢にあわせたのであろうか、閑伽の道具の調整が、「例の」「きはやか」であったということであった。

二例目は、幻巻、『源氏物語大成』一四一六頁に相当する、に語られている。

五月雨はいとどながめ暮らしたまふより外のことなくさうさうしきに、十余日の月はなやかにさし出でたる雲間のめづらしきに大将の君御前にさぶらひたまふ。花橋の月影にいときはやかに見ゆるかをりも、追風になつかしければ、「千代をならせる声」もせなんと待たるるほどに

光源氏五二歳歳の夏、来訪した夕霧とともに亡き紫の上を偲ぶ場面である。五月雨の季節、「十余日の月」が、「雲間のめづらしき」中、夕霧が光源氏のもとに参上した。その月の光が明るくさしこみ、花橋が「いときはやかに」見え、その橘の花の香りが風につてやさしく漂うという情景であった。月の光に浮かぶ視覚的なありさまが「いときはやか」であったわけである。

鈴虫巻、幻巻の「きはやかなり」の用法をふまえると、「許し\*色のきはやかなるに」は、光源氏のお召し物の色が視覚的にはつきりと見える様を意味するといえる。

では、続いて、「うちき」に伴う光源氏像を検証したい。松風巻、『源氏物語大成』一四一六頁に相当する、に語ら

れている光源氏の「桂姿」について確認する。三一歳の秋、大堰を訪問し、明石の君と再会した光源氏を、明石の尼君が覗き込む場面である。

尼君、覗きて見奉るに、老いも忘れ、物思ひも晴るる心地して、うち笑みぬ。東ひんがしの渡わたの殿の下より出づる水の心ばへ繕はせ給ふとて、いとなまめかしき桂姿うち解け給へるを、いとめでたううれしと見奉るに、閑伽あかの具などのあるを見給ふに、思し出でて、「尼君は、こなたにか。いとしどけなき姿なりけりや」とて、御直衣召し出でて奉る。

光源氏は、桂の院に行くとき口実を作つてまで紫の上を残してきたので、あわただしく大堰の邸の改築にあつていた。光源氏は遣り水のたたづまいを修繕するというので、「桂姿」でくつろいでいた。しかし、光源氏は閑伽の道具が出されていたので、尼君のすぐそばにいと気がついて、直衣を取り寄せて着るわけである。光源氏にとつて、明石の君との逢瀬をした翌朝であることの証左が「桂姿」であつたわけである。

なお、参考として、薫の「桂姿」についても確認しておく。

薫二四歳八月、八の宮の一周忌の準備をする中、薫が宇治を訪問し、大君へ思いを訴えたものの、拒否されて帰京した。八の宮の喪が明けたので、あらためて、薫は宇治を訪れ、女房の導きで姫君たちの寢所に向かう。しかし、大君は寢所に入ってきた薫に気がつく場面である。

何心もなく寝入り給へるを、いといとほしく、いかにするわざと胸つぶれて、もろともに隠れなばやと思へど、さも、え立ち返らで、わななくわななく見給へば、灯ひのほのかなるに、桂姿つぎまにて、いと馴れ顔に、几帳かたむらの帷子かたびらを引き上げて入りぬるを、いみじくいとほしく、いかにおぼえたまはむと思ひながら、あやしき壁の面に屏風を立てたる背後のむつかしげなるにゐたまぬ。(総角巻)

大君は、寝所に中の君だけを残して、隠れようとした際に、灯火の元に、「桂姿にて、いと馴れ顔に、几帳の帷子かたびを引き上げて入りぬる」薫を見るのであった。女性のもとに忍び込むのに物慣れた様が薫の「桂姿」であった。大君は自分が身を隠したならば、中の君がどのように感じるかと気毒に思いながらも、壁の内に立ててあった屏風の後ろに隠れるのであった。男の侵入に身を隠す大君のあり方に天人女房譚が指摘されているように、薫の行為は聖域を犯すものであった。薫の「桂姿」こそ、禁忌を侵犯する好き者の有様であったのである。

本断簡「いろのきはやかなるにあをにひのうちきさぬきうちやつれて」は、光源氏が、「薄紅色がはつきりしている桂に、はなだ色の青みなる桂を重ねて、その上に指貫をくだけたさま」に装っている様であったと解釈できる。また、松風巻での後朝における光源氏と、総角巻で大君に向かう薫の「桂姿」をふまえると、須磨巻の光源氏の桂姿には、頭中将の来訪を親しく迎えるための服飾であるだけではなく、退去中にもかかわらず、色好みを指向する光源氏像も醸成されているともいえるのである。

### おわりに

本稿では、藤原為家を伝承筆者とする『源氏物語』『薄雲巻』一葉、後京極良経を伝承筆者とする『源氏物語』『須磨巻』一葉をもとに、鎌倉時代に書写されたと推量される源氏物語切が、本文資料としてだけではなく、作品論の対象として可能性があるとの卑見を述べた。ご教示をいただければ幸いです。

注(1) 藤原為家を伝承筆者とする『源氏物語』古筆切の研究成果については、次に掲げる先学の学恩をいただいた。

①曾澤大吉氏「源氏物語 蓬生 傳藤原為家筆」解題(天理図書館善本叢書和書之部第十四卷源氏物語諸本集二)(八木書店 昭和四十八年)・「源氏物語 鈴虫 傳藤原俊成筆」解題(同 第三十卷源氏物語諸本集二)(八木書店 昭和五十二年)。

②小松茂美氏「18伝藤原為家筆源氏物語切」解説(『古筆学大成 第二十三卷』平成三年六月)。

③高田信敬氏「源氏物語古筆切二題」(『源氏物語と源氏以前 研究と資料』武蔵野書院 平成六年)・『和歌と物語―鶴見 大学図書館蔵貴重書八〇選―』(鶴見大学 平成十六年)・『源氏物語考証稿』(武蔵野書院 平成二十二年)。

④『日本大学蔵源氏物語第十二・十三卷』「藤裏葉卷 伝藤原為家筆」・「同夕霧上・下」(八木書店 平成八年)。

⑤池田和臣氏は、ご架蔵の「伝藤原為家筆 大四半源氏物語切」の真木柱巻の古筆切について、「この断簡は、真木柱巻のもので、朱の句読点がほどこされている。料紙は斐紙、縦三二・七糎、横六・〇糎。きわめて丈の高い料紙が特徴的であり、横皺があるので一見卷子本の断簡かと思われるが、一行目の「ゆ」「や」、三行目の「く」の右肩に、前葉対面の朱点のウツリがあり、元は冊子本と知れる。横皺は、伝来過程で卷子本に改装されてきた時期のあったことをうかがわせる。書写年代も鎌倉時代中期を下らない古さがある。本文系統は河内本である。尾州家本に比するに、断簡一行目「人」が尾州家本では「ひと」と仮名書きになっているのみの違いで、朱点の位置、おどろ字にいたるまで一致している。」(『源氏物語の古筆切』『紀要 文学科 第九一号』中央大学文学部 平成十二年)と、河内本断簡の特徴を指摘されている。

⑥小林強氏「源氏物語関係古筆切資料集成稿」(『本文研究』第六集 平成十六年)。

⑦加藤昌喜氏「42河内本源氏物語 薄雲卷」解説(『古筆への誘い』(国文学研究資料館編 三弥井書店 平成十七年三月)。

- ⑧ 田中登氏「七九 藤原為家 大四半切（源氏物語）」（『平成新修古筆資料集 第四集』思文閣出版 平成二十年九月）、  
 「六八 藤原為家 大四半切（源氏物語）」（『平成新修古筆資料集 第五集』思文閣出版 平成二十二年九月）。また、田  
 中氏は、実践女子大学文芸資料研究所蔵「伝藤原為家筆『源氏物語』薄雲巻」の断簡を紹介した際に、「現実  
 には鎌倉時代中期にまで遡ることができる源氏の本文資料は、そうどこにもあるものではなく、まして、本  
 稿で述べてきたごとく、それがひとり薄雲巻に留まらず、全体で十数葉にも及ぶものであるとしたら、なおさ  
 ら本文研究の上で簡単に見過ごしたりするわけにはゆかないものといえよう。」（伝藤原為家筆『源氏物語』  
 薄雲巻断簡の紹介」（『年報 第二八号 源氏物語特集』実践女子大学文芸資料研究所 平成二十一年三月）と言及されてい  
 る。
- ⑨ 大内英範氏「【20】『源氏物語』断簡（五葉）」解説（『源氏物語千年のかがやき』国文学研究資料館編 思文閣出版 平成  
 二十年九月）。
- ⑩ 岡嶋偉久子氏「尾州家河内本源氏物語の書誌学的考察―鎌倉期本文の成立―」（『源氏物語の新研究―本文と表現を  
 考える』新典社 平成二十年）、なお、岡嶋氏は、「尾州家旧蔵河内本源氏物語」の生成過程について、尾州家本行  
 本文の問題、北条実時との関係から、「尾州家本は料紙の準備段階からすでに河内本を作成するつもりであっ  
 た。そのことは確かであると思われる。そして本書巻末の実時筆と思われる三行は、本書直接の書写・制作の  
 奥書ではないとしても、やはり本尾州家本と実時とが深い関わりを持っていることを示している。」（『源氏物語  
 写本の書誌学的研究』第二章 尾州家旧蔵河内本源氏物語 一三〇頁 おうふう 平成二十二年五月）と論述されている。
- ⑪ 横井孝氏「源氏物語の本文と表現」（⑩『源氏物語の新研究』書）。
- なお、國學院大學図書館に、伝藤原為家筆『源氏物語』「花宴巻」（一軸）が所蔵されている（渋谷榮一氏「源氏物



語 花宴（一軸）について」『國學院大學図書館紀要第七号』平成七年三月）。元は十二丁の冊子本（縦三二糎）を卷子本に改装したものである。参考として、巻頭の画像を示す。

- (2) 「中扉図版解説」〔実践女子大学百二十年記念展覧会図録〕五頁（平成二十六年六月）、なお、「2 伝藤原為家筆『源氏物語』断簡」には、「鎌倉時代一三世紀の書写。古筆切は一枚の紙を剥いで二枚にするものだが、これは剥がされず表裏が残っており、もとの書物の形を類推できる珍しい例」と解説されている〔同〕七頁。

- (3) 『尾州家河内本源氏物語第三卷』二四九～二五一頁（八木書店 平成二十三年）。

- (4) 別本という学術語は、青表紙本、河内本のように系統を指示するものではないので、本断簡と陽明文庫所蔵本とを対校することのためにためらいもあるが、鎌倉時代写本の一本と比較することには意義があると思量した。

- (5) 『陽明叢書国書篇第十六輯源氏物語五』「薄雲卷」二三六～三七頁（八木書店 昭和五十五年三月）。

- (6) 『新編日本古典文学全集21源氏物語②』（第一版、第二刷 小学館 平成七年五月）。

- (7) 『新日本古典文学大系20源氏物語二』（第一刷 岩波書店 平成六年一月）。

- (8) 本断簡は、縦二十四・一糎、横七・五糎であるが、元は、横十五糎で一面八行書であったものと思量される。後京極良経を伝承筆者とする『源氏物語』古筆切は、五種類、十葉（図一七七～一三六）が紹介されている（小松茂美氏編『古筆学大成 第二十三卷』平成四年六月）。その中で、(一)、(四)、(五)の本文系統が河内本、(二)は青表紙本と指摘されている。また、伝後京極良経筆の断簡として、藤井隆氏が田中登氏蔵「椎本卷」の一葉を紹介され、本文系統を河内本と指摘されている〔国文学古筆切入門〕「八三、伝後京極良経筆四半切〔源氏物語〕」一八四・五頁 和泉書院 昭和六〇年二月）。

- (9) 『陽明叢書国書篇第十六輯源氏物語四』「須磨卷」一〇五～一六頁（八木書店 昭和五十四年十二月）。

(10) 河内本の一本とされている高松宮本は、「うちき」とある。本断簡も河内本系統のものと思量される。

(國學院大學教授)